

二〇二二年度

一般入試② 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二〇ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

中学一年の夏休み、図書委員の当番でたまたま一緒に<sup>いっしょ</sup>になった「俺」(霜村典)、瀬尾幹、寺佐々矢、鯨井夏野の四人は、夏休みの自由課題として笹屋<sup>ささや</sup>というバンドを組み、録音した音声を提出することにした。しかし直前になり、高い声をクラスメイトにからかわれていた幹からの申し出があり、書類から幹の名前を消して提出することとなる。四人は課題提出後も、顔が映らないように動画を作り、投稿<sup>こうこう</sup>サイトに公開するが、しばらくして学校で幹以外の三人の名前が知られてしまう。残りの一人が誰か話題になる中、幹はバンド仲間からの連絡<sup>れんらく</sup>にも応答しなくなる。

視界の隅<sup>すみ</sup>で、旧校舍側の扉<sup>とびら</sup>から誰かが出てくる。

ぱつと認識したのは男子の制服で、先生じゃないってことにひと安心する。しかも上履<sup>うわば</sup>きの色は同じ一年生。

いちおう来るのが知り合いか確かめておきたくて、靴下<sup>くつした</sup>で渡り廊下<sup>わたりろうか</sup>に上がりながら、そっちの方向に目をやった。ちらつと見るだけのつもりだったのに、視線をはがせなくなった。

幹だった。

ぱちつと目が合って、幹も俺に気づいた。何メートルかはなれた地点で止まって、それ以上は近づいてこない。肩<sup>かた</sup>に通学用のカバンを提<sup>さ</sup>げていて、中身のつまった重そうなそれの持ち手が、だらりと腕<sup>うで</sup>にかかっている。見開かれた目は俺をとらえて動かない。

……なんか久しぶりだね、会うの。

あ、理科室に行くところ？ たしか科学部も活動日だね。俺も部活あるんだけど、落ち葉掃除<sup>ごうじ</sup>が終わらなくて。

ことばは瞬時<sup>しゅんじ</sup>にあふれ出てくるのに、どれも声にするのを迷った。

俺と話しているところを、幹は誰かに見られたくないんじゃないか。どんなささいなことだって、笹屋のメンバーだという特定につながる可能性はある。そんなの絶対に嫌<sup>いや</sup>だろうから。

気軽に名前を呼ぶのさえまずいのもかもしれない。

やめとこう。そのほうがいい。

何気なく目をそらしちゃえば済むことだ、けど。

こんな目の前にいて、幹、というそのたったひとつことも発せない自分は、もう友だちでもなんでもないんじゃないかって、ひどく悲しくなった。

「霜村」

真後ろから大人の声がして、俺は飛び上がりかけた。

ぐるんとふり向くと、至近距離<sup>きんきょり</sup>に深緑色のセーターがせまってきた。視線を上げる。こわもての社会の先生が俺のとをじつと見下ろしている。

うわ出た、学年主任！

反射的に「こんにちは」と返したけど、心臓<sup>こころ</sup>がばくばく暴れ回ってうるさい。この先生は無愛想で、いつも私語や生活態度に厳しくて、圧を感じるから苦手だ。

俺は先生からはなれるようにして、一步<sup>むき</sup>脇へよけた。邪魔<sup>じやま</sup>なところにぼうっと立って通路をふさぐなどと注意されたんだと思っただからだ。

ちゃんと通り道をつくったのに、なぜか先生は歩き出そうとせず、俺の足もとに視線を落とした。

念入りにチェックされてのを感じる。

……ああよかった、靴脱<sup>む</sup>いどいて。ほら、さっきの判断は正解。こんなことでいちいち叱<sup>しか</sup>られちゃたまんない。

そうやって数十秒前の自分に拍手<sup>あしづ</sup>を送りそうになったとき、

「バンドを組んだんだってな」

完全に不意打ちを食<sup>く</sup>らって、俺はまじまじと先生を見つめ返した。その単語がここで出てくるとは思わなくて、なんらかの難しい意味をもつ、未知のものに一瞬<sup>いつしゆん</sup>思えた。

なんでこの先生が知ってるんだらう？

誰が教えた？

どこまで噂<sup>うわさ</sup>が、……あ、そっか、夏休みのグループ研究！ あの提出物を先生も見たのなら、バンドのことは知って

たつて当然だ。

「動画を投稿してると聞いた」

あつさり言われて、<sup>2</sup>背筋がすうつとつめたくなつた。

やばい。笹屋の活動を具体的に知られてる。これまで担任からもほかの先生からも訊かれたことなんかなかったのに。見て見ぬふりされてただけなのか？ 実はとつくに問題視されてた？

どうしよう。どうしたらいいんだろう。こんなの尋問だ。下手なごまかしが通用する相手じゃない。とりあえず「はい」とだけ答えると、<sup>3</sup>喉を締めつけられたような声が出た。

「あ、でも。もう非公開にしたので……」

視線をうろつかせながら言いわけしたら、先生は太い眉を寄せた。

次に核心を突く質問が来ると、どうしてか予想できた。当たってほしくなかったのに、それは当たった。

「霜村、三組の鯨井、四組の寺。あと、もうひとりいるって？」

あと、もうひとり。

<sup>4</sup>後ろを見るな。……今、そつちを見ちゃだめだ。

焦つてぐちゃぐちゃに混乱する中で、それだけはわかつた。どんなに近くにいるとしても。どんなに隣に立っていても。違いますが、もうひとりなんていません。

否定しようとして、唇がうまく動かなかつた。声が出ない。

言い逃れできる可能性がどれだけあるんだろう。いったい何を守ろうとしてるんだろう。けど、わずかな可能性に賭けるためならどんな下手くそな嘘だつてつく。

邪魔しないでください。

どうか放つておいて。

始まつたばつかで終わるのは嫌だ。

<sup>5</sup>せつかく見つけた場所なんだ。お願いだから。

お願いだから、もう少しだけ。

「……僕です」

そのかすれた声は、すごく近くから、ほとんど自分の中から聞こえたみたいだった。

ほんの二週間くらい耳にしてなかつただけなのに、<sup>6</sup>この声の持ち主を、長いあいだ探し続けていた気がした。

図書室で初めて出会ったときから、俺はこの声が好きだった。もつとしゃべってほしかったし、しゃべりたくないなら黙つていてくれてよかった。四人で同じ空間にいるだけで楽しかった。そのときもこれから、なんでもない話をして、歌つて、笑い合いたかつた。

俺は渡り廊下をふり返り、「幹」と友だちの名前を呼ぶ。

幹はそこに立っている。カバンを足もとに落として、少し青ざめた顔で、<sup>7</sup>白い両手をぎゅつとにぎりしめて。

どこにも行かずに、そこにいる。

「ピアノを弾いてたのは僕です。僕も笹屋のメンバーなんです」

### (中略)

自らメンバーだと名乗り出た幹は、不意を突かれて押し黙っている先生に向かって、訊いたんだ。

<sup>8</sup>「来年のクラス分けを決めるのは、先生ですか？」

突拍子もない質問に俺はびっくりしたし、いつも厳しい顔つきの先生もめずらしく眉を上げて、まぢがいなく驚いていたと思う。

「僕、今のクラスがつらいです」

幹は言った。気圧されるくらい必死に。

「からかわれるのが嫌だから、毎日、できるだけ目立たないように過ごしています。からかってくるひとのことはどうしよう

もないから、自分が変わればいいんだと思ってました。でも、……」  
9　そこで声が大きくゆらいだ。

俺はいてもたってもいられなくて駆け寄った。本気で訴えている友だちを支えたくて。味方だよと伝えたくて。だけどいざ近づいてみたら、こういう行動が、むしろ幹に対して失礼なんじゃないかと思えてきた。背中をぼんとたたいたり、そもそもふれたりすることが。だから中途半端にあげた手の行き場がなくて、ただおろおろして隣にいただけだった。

支えなくたって、幹はちゃんと立っていた。

自分の足で。意思をもって。

「でもこれ以上は、無理です。……来年からは、はなれたい。嫌いなひとは嫌いだし、自分の好きなものを好きでいたいです」

まつ毛にたまった涙が落ちる。

静かにすうっと、片方の頬に線が光った。

「今言っておかないと、後悔しちゃうから、言いました」

「……クラス分けは会議で決まるんだ。必ず瀬尾の希望通りにするって、約束するのは難しい」

先生は答える。いつもの授業みたいに硬く、よそよそしい口調で。

俺は先生を見すえる。どうして聞き入れてくれないのかって、怒りがぶわっと湧き上がる。悔しくて、身体が燃えるように熱かった。敵だとさえ思った。戦うべき相手はこのひとだったんだって。

先生は、そんな気持ちを見透かしているみたいに、ちらりと俺のを見た。

そしてふたたび幹に向かい合った。

「でも、その会議で意見は出せる。出すって約束する。……気づけなくて悪かった。いつでもいい、瀬尾の話聞かせてくれないか」

幹がまばたきました。

その弾みでまたぼろぼろ涙がこぼれて、それをうっとうしそうに、制服の袖でぐいっとぬぐった。

俺はなんて声をかけたらいいか思いつかなくて、とりあえず落ちていた幹のカバンを拾った。ばふばふたいてほこりを払いながら、本当はほっとして、一緒に泣きたいくらいだった。

12　カチツと音を立てて何かが噛み合ったのを感じた。

嫌になるくらい大きなものだった一部分かもしれないけど、でも、ずっと重たくきしんでいたそれを幹が動かした。自分自身のことばで、声で。

やっぱり幹はすごいよ。知ってたけど、あらためて思う。

すると赤い目をした幹が、きよとんとした顔で俺を見つめてきた。

「典くん、髪に……?」

つまみ上げてくれたのは、真っ黄色の葉っぱのかけら。

それで俺は、自分が左手に靴を持っていることと、どこへ向かう途中だったかを思い出して「ああっ」と叫んだ。

「事務室!」

「じむしつ?」

「落ち葉入れる袋もらうんだ。幹も部活じゃない?」

「あつ。うん、今日実験の日で……!」

つまりお互い先輩たちを待たせちゃってる。

とにかくカバンを受け渡して、あわあわしながら別方向へ駆け出そうとして、はっと気づいてふたりして先生に会釈した。先生はわかったってふうに軽く手をあげた。

その別れ際「それにしても行動力あるな」と言ったんだ。

廊下のあつちとこちでふり向いた俺と幹に向かって、まったく表情を変えずに、ひょうひょうと。

「動画は観てないが、グループ研究の曲は聴いたよ。来年は文化祭に出たらどうだ?」

問一——線部1「心臓がばくばく暴れ回ってうるさい」とあるが、この時の「俺」の心情の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幹の名を呼ぶことさえできず落ち込んでいた時に、苦手な先生が背後からせまってきていたことにひどく取り乱し、その上その先生が怒ったようにこちらを見続けているため、ますます冷静さを失っている。

イ 幹のことを心配し、渡り廊下にはんやりと立っていたところに、苦手にしている先生が突然現れたため、先生に叱られる心当たりはまったくないものの、何かとがめられるのではないかと平静さを失っている。

ウ 気軽に声をかけることさえできなくなった幹のことを考えて周りが見えていなかったため、苦手にしている先生から急に声をかけられたことに大きく動揺してしまい、落ち着きを取りもどせずにいる。

エ 幹にかけることばが見つからず困っていた際に、厳しい先生に突然呼び止められたことに驚き、反射的にいい加減なあいさつをしたことで先生を余計に怒らせたように感じ、動揺をおさえきれずにいる。

問二——線部2「背筋がすうっとつめたくなった」とあるが、この時の「俺」の心情の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが動画を投稿したことまでも先生に知られていることに驚き、先生がどこまで知っていて、何を問いたでそうとしているのかわからず、恐ろしさを感じている。

イ 提出物を見てバンドのことを知っているだけだと思っただが、情報を小出しにしてこちらの反応をさぐりながら話を進める先生の意図がわからず、ひどくうろたえている。

ウ 主任の先生がわざわざ自分にバンドのことを聞いてきたことから、動画を投稿したことが学校の中で大きな問題になっっていることを確信し、おじけづいている。

エ 先生が動画投稿のことをあっさり伝えてきたことから、バンド活動のすべてを知られているのではないかと思い、落ち着き払った先生の様子に不気味さを感じている。

問三——線部3「喉を締めつけられたような声が出た」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笹屋の活動を具体的に先生に問われ、下手にごまかそうとしたところで、結局はすべてを白状するまで先生に許してもらえないと思い、重圧を感じているから。

イ まさか知られていないと思っていた笹屋の活動について先生に問われ、何とか取りつくろおうと思いつつも、簡単にごまかせる気がせず、追いつめられているから。

ウ 先生たちは笹屋の活動を知りつつ見て見ぬふりをしていただけだとわかり、その驚きで頭が真っ白になってしまっただけで、どう対応していいかわからず、追い込まれているから。

エ 先生が笹屋の活動について知っていることがわかり、メンバーの中に幹がいることだけは何とかごまかさなければならぬと焦ってしまい、気が動転しているから。

問四——線部4「後ろを見るな。……今、そっちを見ちゃだめだ」とあるが、「俺」がこのように思ったのはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笹屋の残りのメンバーを先生がさぐっている状況でも、うまくやれば必ずごまかしきれはるはずだが、幹を見てしまえば先生にヒントをあたえてしまうことになるので、そのようなふるまいは避けるべきだと考えているから。

イ 笹屋の残りのメンバーは幹であるのだが、幹はそのことを知られたくなくて自分たちと関わりを持たないようにしており、そんな幹にこの絶体絶命の状況下にあるとはいえ、意地でも頼りたくないと考えているから。

ウ 笹屋の残りのメンバーについて、それが幹であることを先生はわかっていた上で聞いているのは明らかで、ふり返って幹を見てしまえば、先生の仕組んだ誘いに乗って自ら認めてしまうことになると考えているから。

エ 笹屋の残りのメンバーを先生に聞かれている状況で、本当のことを言えるはずもないが、今ふり返ってしまえば、自分の視線によって、先生に幹がそのメンバーであることを教えてしまうことになると考えているから。

問五 —— 線部5「せっかく見つけた場所」とあるが、それは「俺」にとってどのような「場所」か。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲に気をつかう必要がなく、自分の意思で活動ができる場所。
- イ 好きなものを共有する仲間と競い合って、自分を高められる場所。
- ウ 学校生活でつらいことがあった時に、いつでも逃げ込める場所。
- エ 仲間とただ一緒に過ごすこと自体に、心地よさを感じられる場所。

問六 —— 線部6「この声の持ち主を、長いあいだ探し続けていた気がした」とあるが、この時の「俺」について説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この二週間は幹と疎遠そえんになっていたため、つらい思いをしてきたが、幹が自分からバンドのメンバーだと先生に申し出たことで、これからもバンドを続けられるかもしれないという希望が湧いた。
- イ 久しぶりに会っても声をかけられず、もう友だちにはもどれないのではないかと思っていたが、幹の声を聞いたことで、幹と以前のような関係にもどりたいと願っていた自分の気持ちに気づいた。
- ウ 久しぶりに幹の少しかすれた声を聞いたことで、バンドで音楽を演奏していた時のことがありありと思い出され、やはり笹屋には幹の歌声こそが必要だったのだと今になってようやく実感した。
- エ 幹が自分のことを嫌っているのではないかと思い、ずっと声をかけられなかったが、幹は自分のことを助けるために勇気を出して名乗り出てくれたのだと気づき、うれしさで胸がいっぱいになった。

問七 —— 線部7「白い両手をぎゅつとにぎりしめて」とあるが、この時の幹について説明したものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア クラスメイトにからかわれ続けていることがとてもつらいので、たとえ友人である「俺」の前で弱みを見せることになったとしても、今の自分の気持ちを先生に訴えるしかないと思いつめている。
- イ 学校で目立つことを避けてきたが、自分をかばうために返答に困っている「俺」に、これ以上迷惑めいわくをかけられないと思い、不本意ではあるが隠してきたことを先生に話すしかないと覚悟を固めている。
- ウ 自分が「俺」と同じバンドのメンバーであることを、バンドの仲間以外には絶対に知られたくないと思ってきたが、その気持ちを乗りこえて、先生に本当のことを伝えようと改めて決意している。
- エ 「俺」と同じバンドの一員であることがわかってしまうと、またからかわれることになるが、それでもバンドへの思いを示したいと思い、先生に思い切って本当のことを打ち明けようと決心している。

問八 —— 線部8「突拍子もない」とあるが、「俺」がこのように受け止めたのはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今話題になっているのは笹屋のメンバーであるかどうかであって、幹が持ち出したクラス分けの話はそれとはまったく無関係の話題であるように思えたから。
- イ 笹屋のメンバーであることを認めながら、幹はクラス分けの話を持ち出して話題を変えようとしているが、それはいかに無理があるように思えたから。
- ウ 自ら笹屋のメンバーであることを告げた上で、必死にクラス分けの話をする幹に、クラス分けも大事であることはわかるが、今すべき話ではないと感じたから。
- エ 笹屋のメンバーであることを告白したことをきっかけに、幹がクラス分けに関して要望を出しはじめたが、それは生徒として行き過ぎた行いであると感じたから。

問九 —— 線部 9 「そこで声が大きくゆらいだ」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がからかわれていたことを話すうちに、これまで味わってきたつらい体験がよみがえってきて、もうこれ以上はたえられないという気持ちが込み上げ、それを先生に打ち明けようとして感情が高ぶっているから。
- イ からかわれないように目立つことは避けているという話をするうちに、自分の思いを押し殺して生きていくのはもう嫌だという気持ちになったが、その一方で先生に訴えたら今後どうなるのか不安がつのつてきたから。
- ウ 先生に必死に話をしているうちに、からかわれないようにバンドの仲間と距離をおかなければならなかった苦しさを感じ出され、大切な仲間を裏切るとは二度としたくないという気持ちが湧き上がってきたから。
- エ クラスでからかわれているという話をするうちに、そのつらさにもうたえられないという気持ちが込み上げ、クラスメイトの反感を買ったとしても、先生に今こそ伝えるしかないと思い、気持ちが高ぶっているから。

問十 —— 線部 10 「むしろ幹に対して失礼なんじゃないかと思えてきた」とあるが、「俺」がこのように思ったのはなぜか。その理由を五〇字以上、七〇字以内で答えなさい。説明する際には「決めつける」という言葉を必ず用いること。なお、「決めつける」は活用（後に続く語にあわせて形を変えること）させてもよい。

問十一 —— 線部 11 「戦うべき相手はこのひとつだったんだって」とあるが、「俺」がこのように思ったのはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幹が今のクラスでつらい思いをしていることに気づかないばかりか、幹の希望を聞き入れるつもりはないと言いつつた先生のこと許せず、この先生のせいで幹がつらい目にあっているに違いないと思ったから。
- イ 幹が意を決して今のクラスへの思いを打ち明けたのに、先生が幹の希望通りになるとは約束できないと冷淡に告げたことにいきどおり、幹のつらい状況を変えるには先生を考えを改めさせるしかないと思ったから。
- ウ 幹が勇気を出して今のクラスでのつらい立場について相談したのに、先生が事の重大さを認識してくれないため、幹の立場を好転させるためには、自分が幹の代わりに先生を説きふせるしかないと思ったから。
- エ 幹が自分からクラスでのいじめを告発したことを喜ばしく思う一方で、それを知っても対応しないのは、いじめを隠そうとするのと同じだと考え、そんな先生のひきょうな態度は受け入れられないと思ったから。

問十二 —— 線部 12 「カチツと音を立てて何かが噛み合った」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア つらい状況を変えたいという幹の先生へのことばに強く共感し、はなれていた幹と自分の気持ちが再び一緒になったということ。
- イ 幹のことばが先生に届いたことで、つらい立場にあった幹の今の状況が変わりはじめる確かな手があつたということ。
- ウ 幹の先生へのことばから、できるところから現状を変えていきたいという幹の強い意思がはっきりと伝わってきたということ。
- エ 気迫きはのこもった幹のことばが、冷たかった先生の心に届いて、先生の態度を幹に寄りそうものに見事に改めさせたということ。

## 二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小説の書き方を教えるのは難しい。数学者は算術を、歴史学者は歴史を教えられるが小説家は小説を、学問を授けるように教えられるわけではない。

その小説の書き方なら、教えられるかもしれない。料理の作り方を教えてくれといわれても困るが、カレーの作り方なら教えられるのと同様に。

2 いっそ冷蔵庫の中をみせてくれ、と言いたくなる。にんじんに豚肉、なるほど、カレーだな、肉じゃがだな、それならば……といった具合に「教え」が始まる。

でもやはり難しい。無遠慮に冷蔵庫を開けるように人の頭をのぞき込んでみても、小説の「具」は、にんじんや豚肉のようではない。その「具」は「記憶」かもしれないし「印象」かもしれない。「考え」や「哲学」かもしれないが、とにかく小説を書きたい人、一人一人の、それぞれの頭の中にある「具」はほかの誰のものとも違う、どこまでも固有のものである。もしかしたら、それが具になると認識さえしていない景色や言葉の印象や違和感などは、にんじんや豚肉のように確固たる存在として共有できない。千差万別の「具」の料理法をどう「教えれば」いいんだ。

④注 ゼロ年代半ばごろ、当時お茶の水にあった専門学校の創作コウザで小説を教えた。

授業名はなんでもいいといわれたが、開き直って「小説の書き方」と銘打った。小説を教えることの不可能性を示すことで、逆説的に小説とはなにかをつかみ取ってほしいと思ったのだ。

4 「一学期の最初の授業では必ず、生徒たちにアンケートをとった。「好きな小説や漫画」「好きな音楽」などを尋ねるのだが、最後に二問「あなたの好きな4コマ漫画を(4コマの内容を)教えてください」「あなたが寝ていてみた、面白い夢を教えてください」とした。

最後の二問だけ、誰もが苦心する。「一コマ目、カツオがつまみ食いする。二コマ目、追いかけるサザエさん……」といった具合に漫画の中身を文字にするのだが、そうするとどうだろう。漫画の「面白さ」が抜け落ちる。文字では、漫画の

「出来事」しか伝達できない。面白かった夢も、説明したらつまらなくなることは大勢に経験があるだろう。

夢を書き言葉で表現することで、また、漫画を言語に置き換えることで、言葉というものの得意・不得意を実感してもらったのだ。

また、漫画を文字で伝達する際、誰もが知らずに「工夫」をする。そもそも「一コマ目。二コマ目」と文字で「書く」時点で、伝えるための工夫の始まりだ。5 小説は高尚な、文学的ななかである以前にまず「文章」だ。文章の工夫の集積なんだよ、というようなことを述べて、一年間の授業の始まりとしたのだった。

何年目だったか、とてもやる気のない子がいた。親のイコウで仕方なく登校しており、授業中でも断りなくプイ、と外に出してしまうし、朗読をあてたら泣いて抗議された。

そんな子だから最初のアンケートも、少しもまじめに答えなかった。単に生徒の趣味嗜好を知りたくて設問している「好きな映画」も「音楽」も「なし」。面白い4コマ漫画も回答はなかった。安直に決めつけたくはなかったものの、ついつい「これがいわゆる『ゆとり世代』か」と陰で嘆息の漏れる、手をやく生徒だった。

そんな彼女だが小説は提出した。後期の授業で、必ず小説を発表するルールだった。授業は嫌だし興味もないが、落第だけはどうしても避けたかったのらしい。僕は彼女の規定ギリギリに短い小説を読んで、驚いた。

いかにも覇気のない、汚い字で原稿用紙に手書きされたそれは、作者自身と思しき女の子がX JAPANのHIDE(というミュージシャン)のことを好きで好きでたまらない! という(だけの)小説だった。HIDEはすでに故人だったが、これこれのきっかけで好きになった。追悼コンサートにもいったし、とにかくこよくて好きだ、と。そういったことが書かれていた。

そんな小説じゃない、作文だと断じる人もいるだろう。僕は、いや、これが小説だ! と(心で)叫んだ。

思い出してほしい。この作者は最初の「アンケート」で「好きな音楽」を訊かれたとき、なにも言葉を出さなかったという(気持ちは分かる。彼女以外にも、空欄の子はいた。よく知らない初対面のおじさんなんか、ごくごくパーソナルな趣味嗜好を開陳したくないという、若者特有の自意識が働くのだろう)。

それがどうだろう。「小説」を書けといったら、いとも簡単に、頭の中をむき出しにして、大事な「具」を、言葉をポロンと出した。

小説も、アンケートも同じ「言葉」なのに。

小説のときだけ、語る相手が誰とか、自分がどう思われるとか、そういうことがまるで無効になる。そうだよ、と僕は（すでにたくさん小説をカンコウ<sup>d</sup>していたのに）強く得心した。それが小説という言語手段の効用だ。僕は——先生なのに——自分が一番教えを授かった者の顔をしていた。

彼女は自分の小説が組上<sup>せじょう</sup>にあがった授業の際も、僕のゲキシヨウ<sup>e</sup>の言葉の途中で席を立てて出て行ってしまったが、無事に単位を取得した（僕が「可」としたからだ）。僕は今では、小説の書き方を教えるのはほぼ諦<sup>あきら</sup>めている。

とはいえ<sup>9</sup>（余談だが）このときの数年間の授業で唯一<sup>ゆいいつ</sup>、生徒たちに放った、具体的かつ有効な「小説の書き方」を最後に一つ、伝授しよう。

小説をとりあえず最後まで書いたら読み返すだろう。欠点がないか、加筆できるところがないか、原稿用紙か、印刷した紙を読み直すだろう。それで、直すべきところに赤ペンで記入して、それをもとにまた、書き直す。それを何度か繰り返して、練り上げていくだろう。

その際、印刷した小説を最初から読み直して、書き直したら、二度目に印刷したときは決して、最初から読み直してはいけない。10枚なら5枚目、100枚なら50枚目から読み直さない。

そうでないと、最初のほうばかりよくなって、途中からが雑な直しになる。人は疲<sup>つか</sup>れるし、飽<sup>あ</sup>きる生き物だから。僕が生徒たちに「してよかったな」「あれはいい指導だった」と誇<sup>ほこ</sup>れるアドバイスは、それだけだ。

（長嶋有「小説の、書き方」）

⑨ ゼロ年代：二〇〇〇年から二〇〇九年までの十年間を指す区分。

ゆとり世代：二〇〇二年から二〇一一年の間に、授業の時間数や内容を少なくすることで、ゆとりを持った教育を受けた世代を指す。

問一 〜〜線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「小説家は小説を、学問を授けるように教えられるわけではない」とあるが、どういうことか。次のことから最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 算術や歴史はある程度定まった手順があり、教える内容も決まってくるが、小説には誰にでも当てはまる教え方はなく、教える内容も明確には決まらないということ。

イ 算術や歴史は専門家であれば豊富な知識があるので教えることができるが、小説家は小説についての知識が豊富だとは限らず、教えられないこともあるということ。

ウ 算術や歴史は誰が教えても一定の水準を保つたものになるが、小説は小説家ごとに教え方に個性が強く出て、教える内容の質にどうしても差が出てしまうということ。

エ 算術や歴史は知識をもつ側が知識をもたない側に教え込む形を取るが、小説は知識をもたない側が積極的に知識を得ようとしなければ何も得られないということ。

問三 —— 線部2「いっそ冷蔵庫の中をみせてくれ、と言いたくなる」とあるが、筆者がこのように思ったのはなぜだと考えられるか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒が恥はずかしがらずに頭の中のアイデアを伝え、わからないところを聞いてくれれば、その度に指導することで小説を練り上げていけると思っているから。

イ 生徒の心の中をのぞいて、書きたい場面や設定の一部だけでもわかれば、小説を書く技術を一から教えて良い小説を書かせることはできると思っているから。

ウ 生徒の頭の中にある、小説になりそうな要素やイメージを知ることができれば、小説の書き方についてまだ教えようがあるかもしれないと思っているから。

エ 生徒が心の中で書きたいと思っている小説のジャンルを教えてくれれば、そのジャンルのよくある書き方なら教えられるかもしれないと思っているから。

問四 —— 線部3「小説の『具』は、にんじんや豚肉のようではない」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小説を書くための材料は、確かな形で存在しているものではなく、小説を書きたい人自身もよくわかっていないものであるため、教える側と共有するには、教わる側自身がまず自分の材料を理解する必要があるということ。

イ 小説を書くための材料は、他の材料と簡単に取りかえられるものではなく、本来小説を書きたい人が工夫をこらして用意しているものであるため、教える側のすすめる材料を教わる側が受け入れるのは難しいということ。

ウ 小説を書くための材料は、目や耳で実際に確認できるものではなく、小説を書きたい人の頭の中に存在する、その人特有のものであるため、教える側と教わる側で材料を共有することは簡単にはいかないということ。

エ 小説を書くための材料は、他者が無遠慮に確認できるものではなく、小説を書きたい人の強い思い入れが感じられるものであるため、教わる側のもつ材料を教える側が確認するときには配慮が必要になるということ。

問五 —— 線部4「一学期の最初の授業では必ず、生徒たちにアンケートをとった」とあるが、このようなことをしたのはなぜか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好きな小説や漫画、音楽を尋ね、それぞれの趣味や考え方が多様であることを示すことで、小説の書き方も一通りではないことを生徒に学んでもらうため。

イ 自分にとって思い入れのある漫画や、自分が面白いと思った事柄ことごとであっても、それを言葉だけで説明することは難しいということを生徒に知ってもらうため。

ウ 好きな小説や漫画について教えてもらい、内容を言葉で再現させることで、その小説や漫画の面白さや書き方の工夫などを生徒に認識してもらうため。

エ 自分が面白いと思った夢や漫画でも、好みが違う人たちにその面白さを言葉で説明するのは、かなり難しいということを生徒に理解してもらうため。

問六 —— 線部5「小説は高尚な、文学的ななかである以前にまず『文章』だ」とあるが、どういうことか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小説は、気高く立派ななかを読者に伝えるという目的を達成するためにこそ、目の前にある文章の細部をないがしろにせず、しっかりと工夫をし続ける姿勢が求められるものだということ。

イ 小説は、その内容の立派さを読者に納得してもらうためには、文章を一つ一つ工夫することで、読者を少しずつ作品の世界に引き込んでいく地道な努力が何よりも大切になるということ。

ウ 小説は、立派で大それたなかを読者に伝えようとすることにそれほど意味はなく、誰もが知らず知らずのうちにしている文章の工夫を、より意識的におこなうことにつきるものだということ。

エ 小説は、意義深く立派ななかを読者に伝えようとするよりも先に、読者に向けて文章を一つ一つ工夫することが大事であり、それを積み重ねることで出来上がっていくものだということ。

問七 —— 線部 6 「驚いた」とあるが、筆者が「驚いた」のはなぜだと考えられるか。その理由の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人の目を気にしているがゆえに、表面上はふてぶてしい態度をとっていた生徒が、小説の中ではふだんの様子とは違い、実に生き生きと自分の好きなものを表現できていたから。

イ これまでまったくやる気を示さなかった生徒が、小説を書くという課題にだけはまじめに取り組み、完成した作品からも、小説で表現することにかかる強い思いが伝わってきたから。

ウ 授業態度がよくない生徒が、雑な字で分量も短く書くことで、いかにも嫌々取り組んだように見せかけながらも、好きなミュージシャンへの愛情が伝わる小説を提出してきたから。

エ これまで自分の好きなものを明かさなかった生徒が、小説を書くように指示したとたん、好きなミュージシャンについて、まさしく小説ともいえるべき作品を書いてきたから。

問八 —— 線部 7 「いや、これが小説だ！」とあるが、筆者がこのように思ったのはなぜだと考えられるか。その理由を説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

彼女の文章は、ただの作文ではなく、（ ） という点で、小説の本質的なあり方を表したものだと思ったから。

問九 —— 線部 8 「僕は——先生なのに——自分が一番教えを授かった者の顔をしていた」とあるが、この表現の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小説とはなにかを生徒につかみ取らせようとしていた自分こそが、小説のことをまったくわかっていなかったことに気がついた様子をあえて他人事ひとことのように描写びやうしすることで、その切なさを際立たせようとしている。

イ 小説を教えることなどできないと考えていただけに、生徒がいとも簡単に小説を書いてきたことに混乱し、動揺が隠しきれない様子をあえて突き放すように描写することで、その情けなさを際立たせようとしている。

ウ 生徒から小説という言語手段の効用を教えられることになり、自分がそれを教える立場にあったのに、ただ感心してしまった様子をあえて客観的に描写することで、そのこっけいさを際立たせようとしている。

エ 小説という言語手段の効用を、生徒から提出された小説を読んだおかげでようやく理解することができて、興奮がおさえきれない様子をあえて淡々と描写することで、その面白さを際立たせようとしている。

問十 —— 線部 9 「余談だが」とあるが、本文の「余談」にあたる部分についての説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「小説の書き方」という授業における唯一の「誇れるアドバイス」として、小説の書き方の本筋ほんすじから外れた内容が示されており、小説の書き方など教えられないという筆者の考えが、おかしみを交えながら強調されている。

イ 「小説の書き方」という授業自体はうまくいかなかったが、その中でも生徒たちに「誇れるアドバイス」を伝えられたと自画自賛している点に、心の中に残るわだかまりを何とか解消しようという筆者の意図が表れている。

ウ 「小説の書き方」という数年間の授業をふりかえった上で、書き終えた小説を読み返す際の手順という、自らが考案した具体的かつ有効な方法が明示されており、筆者がこの授業をおこなった一番の成果が軽妙けいみょうに語られている。

エ 「小説の書き方」という授業で、結局は作品を書き直す時の心得しか伝えられなかったと打ち明けている点に、授業での失敗を自分へのいましめとして、謙虚けんそに小説を書いていこうという筆者の決意がほのめかされている。





受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧

解答用紙2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一  
ウ

問二  
了

問三  
イ

問四  
エ

問五  
エ

問六  
イ

問七  
ウ

問八  
了

問九  
了

問 十			
と	も	も	幹
に	必	持	は
気	要	っ	す
づ	と	て	て
い	し	先	に
た	て	生	自
か	い	に	分
ら	る	本	の
。	と	気	足
	勝	で	で
	手	訴	し
	に	え	っ
	決	て	か
	め	い	り
	っ	る	と
	け	の	立
	て	に	ち
	い	、	、
	た	支	意
	こ	え	思

問十  
イ

問三  
イ

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤
	⑥
	(7)
	(8)

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

問 一	
d	a
刊 行	講 座
e	b
激 賞	意 向
	c
	焼

問二  
ア

問三  
ウ

問四  
ウ

問五  
イ

問六  
エ

問七  
エ

問 八					
	ま	自	う	誰	彼女の文章は、ただの作文ではなく、 という点で、小説の本質的なあり方を表したものだと思っただから。
	に	分	思	に	
	表	に	わ	対	
	現	し	れ	し	
	し	か	る	て	
	た	な	の	表	
	も	い	か	現	
	の	思	と	す	
	だ	い	い	る	
		や	う	の	
		考	こ	か	
		え	と	、	
			に	表	
		想	と	現	
		像	ら	し	
		も	わ	た	
		あ	れ	こ	
		り	ず	と	
		の	に	で	
		ま		ど	

問九  
ウ

問十  
ア